

1930年代・大阪市建築課のモダニズム建築

—大阪市立大学校舎群の周辺—

Building Department of Osaka City and Modernism Architecture in 1930's

—Buildings of Osaka City University—

中嶋節子

Setsuko Nakajima

2000年、日本を代表するモダニズム建築が、DOCOMOMO(Documentation and Conservation of Buildings, sites and neighborhoods of Modern Movement)のリストに加えられたことを契機に、モダニズム建築がにわかに関心を浴びている。DOCOMOMOとは、1989年にオランダで設立された「モダン・ムーヴメントにかかわる建築、敷地、環境の記録と保存」のための国際機関で、世界各国のモダニズム建築を発掘する作業を続けている団体である。日本では、5年ほど前からDOCOMOMOのリストにあげる20作品の選定をめぐって、さまざまな議論が戦わされ、モダニズム建築の再評価が進められてきた。こうしたモダニズム建築、モダニズム運動へのまなざしは、21世紀を迎えるにあたって、20世紀をあらためて見直そうとする動きのひとつとして理解される。また同時に、社寺建築にはじまり、民家、伝統的町並み、近代建築そして近代化遺産へと展開してきた日本の歴史的建造物・環境の保存に、新たな課題が課せられたことを意味している。

実際のところ近年、モダニズム建築には、記録調査というかたちで関わる機会が増えている。机上の議論とは別の次元で、現実にはモダニズム建築が確実に姿を消す方向へと進んでいるようである。こうした事態に直面して、薄汚れた箱にしか見えないモダニズム建築の価値を、説得力をもって示すことの緊急性、そして、それをどのように保存あるいは記録すべきかという問題の難しさを実感している。まさに、Documentation and Conservationが問題なのである。

ここでは、1930年代に大阪市建築課によって設計されたモダニズム建築を、大阪市立大学の校舎群を中心に取り上げ、その周辺を探ることで、関西におけるモダニズム運動の一潮流を紹介したい。これらの一部はすでに取り壊されており、本稿は解体された建物のDocumentationであるとともに、残された建物のConservationにむけての理論的根拠の一端を提示するものである。

1. 「インターナショナル建築会」と大阪市建設課

明治期から建築全体を支配してきた歴史様式との決別は、1920年に東京で結成された「分離派建築会」がもたらした表現主義を経て、ようやく実現への糸口を見出していく。その手法は、建築を幾何学形態あるいは不定形な量塊に還元するというものであった。関西では、1927年に、上野伊三郎、本野精吾、石本喜久治、伊藤正文、新名種夫、中尾保らによって、京都で「日本インターナショナル建築会」(以下、建築会)が結成され、幾何学形態によって構成された機能主義的な建築が目指された。建築会は、結成からわずか6年後の33年に解散するが¹、宣言や綱領を大々的に喧伝するとともに、展覧会の開催や会誌の発行など活発な活動を行い、当時の建築界に強いインパクトを与えた。

会員には、B. タウトやW. グロピウス、G. リートフェルト、R. ノイトラなど海外の著名な建築家も名を連ね、会員数は最も多い時期で200人近くにのぼっている。そのなかには、大阪市建築課の技術者が多く含まれていた。²1930年の建築会の名簿³と32年の大阪市建築課の名簿 [fig.1] を照合すると、常務会員に設計係技師の伊藤正文、新名種夫、客員に建築課長の富士岡重一、研究会員に設計係では技手の矢代幸三郎、本多正道、宮田秀穂、雇の田中芳郎、伊勢谷忠夫、福山良三、臨時雇の広瀬源三郎、工手の野村安太郎、塚安治、中村貞夫、工事係では技手の青木周一、雇の加村寅(富)太郎、赤岩四郎、工手の柳澤暲の計17名の名前が重なる。建築課の技術者74名のうち17名、設計係のみについて言えば37名中、12名が建築会に参加していたことになる。伊藤と新名は建築会の中心人物であり、彼らのもとで設計活動を行っていた技術者のなかに、多くの賛同者を得ていたことは、当時の大阪市の建築を理解する上で重要である。

大阪市時代に伊藤は、大阪商科大学校舎(現大阪市立大学杉本町校舎・1933~34)、一連の市立小学校校舎、大阪市立美術館(1936)などを手がけており、新名は大阪市立電気局庁舎(1930)

¹「日本インターナショナル建築会」の名称から、左翼的団体とみなされたことが原因とされる。昭和初期の時代背景において、彼らの活動が左翼的傾向を帯びていったこともまた事実であった。のちに新名は、「新建築運動の最後の段階の左に口を開いた赤い深淵の前に、純粋技術者の立場においてはたと行詰まった」と話しており、活動が左翼的領域まで踏み込む直前までいって、技術者としてはそれ以上進むことができなかったことを独白している。

²「日本インターナショナル建築会会員」『インターナショナル建築』日本インターナショナル建築会、1930年2月第2号、pp.29-30。

³「大阪市職員録」昭和7年7月1日現在、大阪市役所秘書課、1932年8月発行、pp.266-8。

[fig. 1] 大阪市土木部建築課の構成員

技師課長	富士岡重一（東京大M44）	
庶務係	主事・主査	渡辺三彦
	書記	天原正久 土居節行 松山幾太郎
	雇	平野肇志 寺西喜一郎 桜井良三郎 中村郁治 井上正雄 増井仙治 小林春治
設計係	技師	伊藤正文（主任兼工務課河川係・早大T6） 新名種夫（京都大T13）竹内政治
	技手	杉本虎之助 後藤貴之助（兼市立市民病院技手） 八木幸助 矢代幸三郎 田上辰馬 後藤節二 岡村如水 鴨田薫 本多正道（京都大S2） 桐本楠雅 吉田清三郎 井手正雄（京都大S3） 大野勝三郎 熊本一之 渡辺金蔵 吉川悌治 渡辺久雄 内山哲郎 佐川伊佐夫 宮田秀穂 森口正雄 沖増次 伊勢憲三
	臨時技手	宮崎正夫
	雇	田中芳郎 伊勢谷忠夫 福山良三
	臨時雇	広瀬源三郎
	工手	新熊健三 渡辺正三 野村安太郎 塚安治 川西梅次郎 中村貞蔵
	工事係	技師
工事係	技手	篠原清孝 横山佐久馬 松下利八 尾藤英太郎 三品勝之助 山上富 権藤友蔵 堀新作 青木周市 横田 文夫 竹花未春（早稲田大S2） 占部定一 青井要三 森川喜代之助 小早川謙治 本郷忠夫 長谷川吉次 村井等昌
	臨時技手	片倉正
	雇	下村捨三 加村寅太郎 長谷晃寛 谷垣宣二 出口幸三 赤岩四郎 馬場和夫 篠原実 大津敏晴
	臨時雇	本郷孝
	工手	佐藤健次郎 吉本一夫 福本米治 市川外勇 柳澤瞭

「大阪市職員録」（昭和7年7月1日現在 大阪役所秘書課 昭和7年8月発行）より

をはじめ大阪市立桃谷病院（1930）、大阪電気科学館（1937）など多くの名作を生み出した。彼らの作品をはじめ大阪市の仕事には、建築会の活動期間前後を中心に、建築会が志向した建築のあり方を具体化する試みといえるモダニズムの作品がいくつか残されている。

2. 大阪市立大学（大阪商科大学）の建築

そのひとつが、1931年から建設がはじまる大阪市立大学杉本キャンパスの校舎群である。これらの建築は、市立大学の前身である大阪商科大学の校舎として整備された。現在も、1930年代前半に建設された主要な建物のほぼすべてにあたる、学部本館（現1号館）、予科校舎（現2号館）、高等商業部校舎（現3号館）、図書館・研究室棟および書庫（旧図書館）、体育館（現第1体育館）の5棟が残る⁴。また、当時の史料として、市立大学事務局に「大阪商科大学関係図面」一式（高等商業部校舎31点、予科校舎40点、体育館16点、学部本館47点、図書館・研究室棟および書庫52点、その他4点、合計190点）、同大学大学史資料室に文献資料、古写真等が保管されている。

工事は、本工事3期と付帯工事1期の合計4期に分けて進められ、1931年から33年にかけての第1期工事で予科校舎、高等商業部校舎、体育館が、32年から34年の第3期工事で学部本館、図書館・研究室棟および書庫が完成された。設計は、第1期工事については伊藤正文を中心に進められたことがわかっており、第3期分についても伊藤が担当していたことが指摘される⁵。

5棟は、いずれもモダニズム建築の特徴である鉄筋コンクリートの幾何学形態のマスによって構成されていることは共通するが、立面の処理や細部意匠は建物ごとに変化が見られる。内部は、教室として建てられた3棟については、機能主義的傾向が強く、採光や換気などの配慮は見られるものの、意匠と呼ぶべきものはほとんどなくあっさり仕上げられている。平面は、正面玄関と階段室を中央に置き、その両側に教室を並べる左右対称の平面が基本的に採用される。図書館・研究室棟については、中庭やギャラリー付き2層吹き抜けの閲覧室、半円形平面の新聞閲覧室など変化に富んだプランニングが行われ、5棟中もっとも見所の多い建物となっている。体育館は、体育館と講堂が可動式の扉によって一体化する仕組みになった「ステージ・ギムナジウム」が日本で初めて採用され、さらに、室内温水プールも設けられるなど、最新の設備を備えていた点で注目された⁶。これらの建築について1933年の『新建築』では、「建築は明快な近代調を帯びた意匠で、細部には稍フランス風なものを見ることが出来るが全体として学校建築として推賞するに足るものである」と紹介している⁷。なお、学部本館は2002年に国の登録文化財に

⁴しかし、2003年4月の時点で、高等商業部校舎（現3号館）が新校舎の建設に伴う取り壊し工事中であり、図書館・研究室棟も一部が暫定的に利用されているほかは置かれたままとなっている。

⁵予科校舎、高等商業部校舎、体育館については、1933年4月号の『新建築』に、「設計は大阪市建築課にして主として伊藤正文氏の手になるもので、施工は鹿島組である。」と記される。学部本館、図書館・研究室棟については、当時建築課に勤務した技師への川島智生氏の聞き取り調査による。

⁶「新施設を誇る商大の新校舎」、『大大阪』、1932年11月、第8巻20号、pp.904-5。

⁷「大阪商科大学予科及高商部校舎」、『新建築』、新建築社、1933年4月号、p.89。

指定された。

立面構成と意匠については、それぞれ以下のような特徴が指摘できる。

<高等商業部校舎>

立面は、中央の塔を中心に、左右対称の構成を採る [fig.2]。正面中央部では、1階から3階まで通る柱形とその上部を繋いで連続する3階窓上部の庇が立面の主要素となり、その他の面では平板面（壁・窓）と連続する庇が壁面を構成する。連続する庇は窓上に止まらず、窓の周囲や壁面上を水平そして垂直に自由に延ばされる。庇と柱形は、建物全体に貫かれた構成要素として重要な役割を果たしている。

外観のプロポーションを支配するものとして大きく穿たれた矩形窓、そして印象的に配された円窓があげられる。窓棧は矩形窓でほぼ正方形のグリッド、円窓では幾何学模様のデザインが採用される。幾何学模様は、玄関に取り付けられていた金属製の柵扉にも見られた。

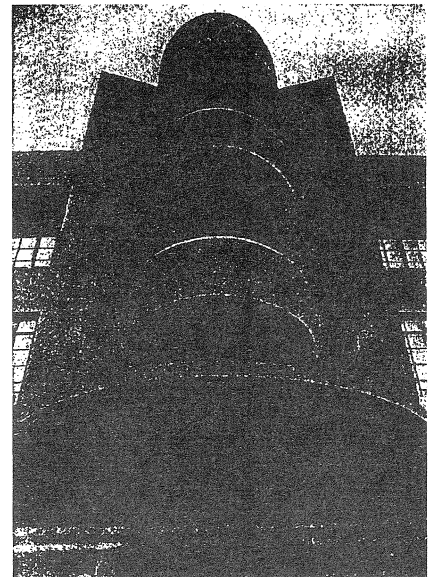
正面玄関には円形の庇が取り付け、キャンティレバーで若干反りながら前面に大きく張り出している。この庇は、他の建物には見られない本建物の特徴的部位となっている [fig.3]。曲線と円によってデザインされた正面玄関の車寄せは、学部本館および図書館・研究室の車寄せと共通する。

<予科校舎>

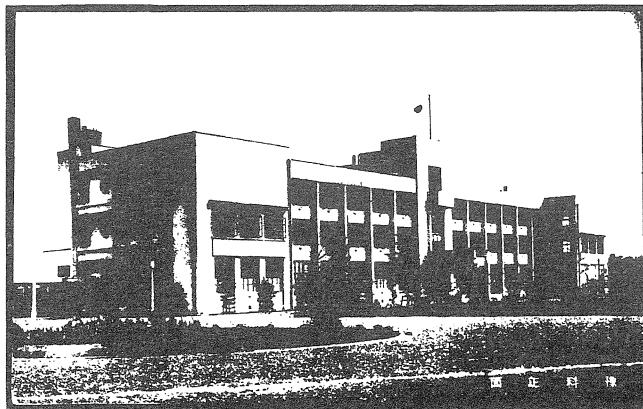
正面玄関上部の塔を中心に左右対称の立面構成をとる [fig.4]。高商部校舎と同様、塔の両側壁面では柱形を外部にあらわし、建物両端の張出し部分では柱形のない平板面とされる。この構成は学部本館にも共通する。庇については、塔の両側部分以外のすべての面で、窓の直上に連続する庇が付けられている。高等商業部校舎と比較すると若干厚く、また、デザイン要素として展開することなく窓上に止まっている。



[fig. 2] 高等商業部校舎（竣工絵葉書）



[fig. 3] 高等商業部校舎正面玄関
（『新建築』1933年4月号）



[fig. 4] 予科校舎（竣工絵葉書）

中央玄関塔の縦に連続するガラス面に、幾何学模様の棧が採用されており、本建物の正面を飾る意匠となっている。また、玄関の柵扉には幾何学模様のデザインが用いられる [fig.5]。窓では、矩形窓は方形グリッドで分割され、円窓には幾何学模様の棧がはめ込まれている。

<体育館>

切妻の妻面を正面に向け、正面入口上部に矩形の窓、さらに上部に円窓（あるいは換気口）を配する [fig.6]。側面にも連続的に窓を設けている。窓ガラスはいずれも棧によってほぼ正方形に分割され、窓の直上には窓を縁取るように折れ曲がる庇が取り付けられる。

<学部本館>

正面玄関上部の塔を中心に左右対称の立面構成をとる [fig.7]。塔は予科校舎、高商部校舎に比べ一段と高く設計され、学部本館としての存在をアピールする。正面側壁面は、中央部分で柱形を外部にあらわし、両端部分では柱形のない平板面とする。壁面の切替え部分や両側面のバルコニーには円筒型デザインが用いられる。

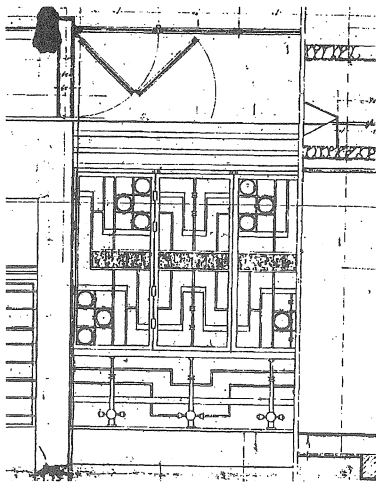
窓上に付けられた連続する庇は、窓の端で折れ曲がって地面へ伸びるもの、バルコニーのスラブと一体化するものなど、窓上のみに止まることなく壁面上で自由に展開する。

内部は玄関および階段室まわりで、他の建物より装飾性が高く、タイルが貼られたりトップライトが設けられたりといった演出が見られる。

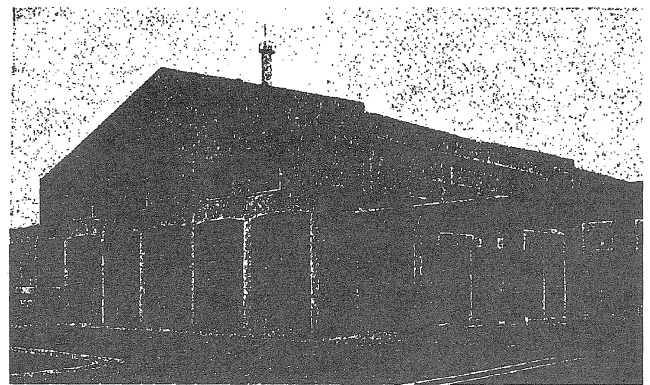
<図書館・研究室棟および書庫>

教室棟がいずれも、玄関塔を軸にほぼ左右対称の構成であるのに対し、図書館・研究室棟ではシンメトリーにこだわらない自由な設計が行われている [fig.8]。

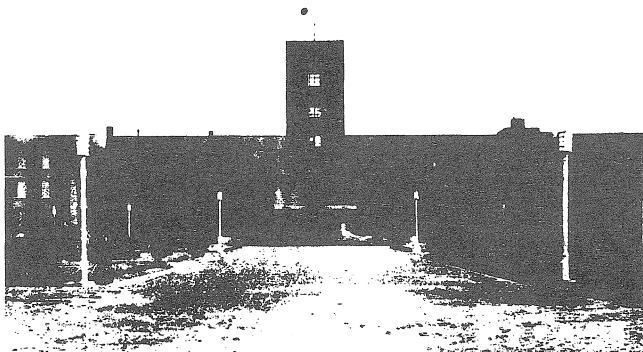
西棟の西面は、玄関部分以外は柱形、連続する庇の帯、大きなガラス窓が開けられた平板面の3つの要素によって構成される。他の校舎においては正面中央を3階窓上部にのみ庇を回し、1、2階の窓には庇を付けないことで、垂直性が強調されているのに対し、図書館・研究室棟では、



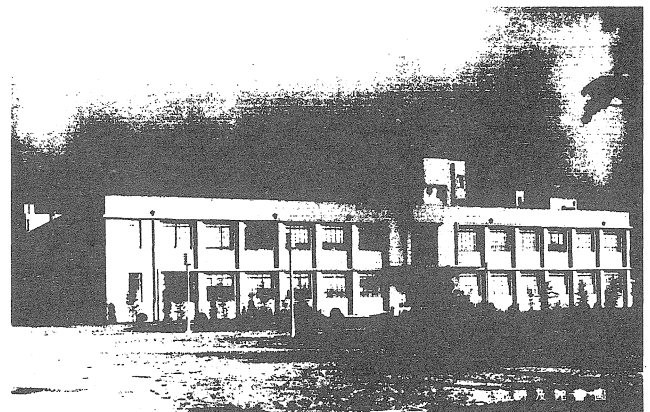
[fig. 5] 予科校舎玄関柵（設計図面）



[fig. 6] 体育館（『新建築』1933年4月号）



[fig. 7] 学部本館（竣工絵葉書）



[fig. 8] 図書館・研究室棟（竣工絵葉書）

1・2階共に底を付けることで、垂直性よりむしろ水平性が指向される。壁面に連続する底の造形的処理は、この建物において、もっとも洗練される。

北棟の玄関ホール東側の壁面は、小さな塔となって壁面上部に突き出し、玄関の存在を主張するが、玄関の中心をはずした位置に置かれることで、象徴的な印象を免れている。北棟の東端には1階をガラス面、2階を手摺と底で構成された円柱形のヴォリュームが取り付く。内部では、円の中心に置かれた円柱が、1階から2階へと伸び、そして柱上部で広がってバルコニーの底になるという感動的な展開を見せる。ガラス面とヴォイドな空間によって構成されたこの部分は、本建物の見所のひとつとなっている。

特徴的な意匠としては、玄関にキャンティレバーでほぼ水平に張り出した矩形の底があげられる。底の先は薄く仕上げられており、その断面処理に建物全体が指向する水平性が見て取れる。図書館・研究室棟は、校舎に求められた「学問の府」としての権威性や象徴性から自由であり、そのぶん設計者の建築理念がもっとも表出した建物といえる。全体としてデザインに破綻が無く、完成度の高い建物である。

3. 「インターナショナル」と「ローカリティ」の問題

大阪市立大学の建築群は、建築会の6年という短い活動期間中に建設されている。そこには、建築会の理念を具体化しようとする足跡を読み取ることが出来る。

建築会は、結成にあたって発表された「宣言」と「綱領」において、「人類の生存」あるいは「人類の進展」を念頭に、「世界各国の同志と連携して共同の目的に向かう」という《インターナショナル》な建築のあり方を希求しつつ、「日本における問題解決に基本を置いて」、「真正なる「ローカリティ」を根底に置く」といった、「狭義の国民性に固執」しない日本固有の《ローカリティ》を求めることを標榜する⁸。さらに、その具体的方策として、《インターナショナル》と《ローカリティ》という相矛盾する概念を融合させ、「必然的に生るべき様式を建設」する必要を主張する。

《ローカリティ》の問題は、1930年前後に建築界で大きな論争となったいわゆる「帝冠様式」をめぐる問題とかかわり、建築会は「日本趣味を基調とする東洋式」とする東京帝室博物館建設設計懸賞の応募心得に、応募拒否の「声明」をもって抗議する⁹。建築会のいうところの《ローカリティ》とは、「帝冠様式」といった日本的な様式ではなく、風土から導かれる形態であった。しかし、こうした独自の志向性を具体化する方策は、建築会として示されることはなく、会員それぞれの作品において模索される。

この問題に一番積極的に取組んだのは、伊藤正文だったといわれる¹⁰。伊藤は、建築会においてもっとも多く発言した人物であり、会誌『インターナショナル建築』[fig. 9]のなかで、《インターナショナル》と《ローカリティ》についてたびたび論じている。そして、建築的に《インターナショナル》と《ローカリティ》を同時に解決する方法として伊藤が行き着いたのは、日本固有の風土が生み出した「庇」や「軒」、「大きな開口部」といった形態的《ローカリティ》を、

⁸ 「日本インターナショナル建築会」宣言・綱領、『インターナショナル建築』日本インターナショナル建築会、1929年8月創刊号、pp.1-2。

⁹ 「声明」『インターナショナル建築』、1931年2月号、p.11。

¹⁰ 伊藤による「インターナショナル」と「ローカリティ」に関する言説については、笠原一人「伊藤正文」(『建築文化』2000年1月第55巻639号、p.141)、において詳しく述べられている。

インターナショナル建築
ARKITEKTURO
INTERNACIA
AUGUSTO 1929
JARO 1 N-RO 1
第一年
八月
創刊號
日本インターナショナル建築會

[fig. 9] 『インターナショナル建築』創刊号

科学技術という《インターナショナル》な手段によって具現化することであった。つまり、《インターナショナル》を科学的、技術的側面に求め、《ローカリティ》を庇や軒といった形態的側面に見出したのである。それは後に、伊藤が専門とした環境工学の分野において「遮光庇」や「ホッパー窓」といった具体的提案として示される¹¹。

大阪市立大学の建築群は、幾何学形のヴォリュームによる構成主義的な組み合わせ、幾何学形の意匠といった《インターナショナル》スタイルでまとめられ、そこに庇や柱形といった《ローカリティ》の要素を付加することで、両者の融合がはかられる。この手法は、杉本キャンパスの建築では第1期工事の予科校舎、高等商業部校舎より第3期工事の学部本館、図書館・研究室棟においてより洗練されたかたちで展開される。

建築会の投げかけた命題は、結局のところ未解決のまま各人の課題として引きずられていくことになるが、建築会の解散直前に完成した大阪市立大学の建築群は、建築会の理念が作品として実現されようとした試みとして、ひとつの到達点であり同時に限界であったといえることができる。伊藤はその後、デザインにおいてではなく、環境工学の分野から新しい建築を追求する¹²。そして、大阪市の仕事としては、1934年の室戸台風で甚大な被害を受けた小学校建築の復興に携わり、採光や通風といった環境工学的な視点から標準設計を示すことになる。こうした伊藤の姿勢は、建築会のいうところの《ローカリティ》である「風土的特質」を、科学的に分析し技術的に処理しようとした点において、建築会の理念を引き継いだものといえる。しかし、大阪市立大学校舎群で見られた、それらをデザインとして建築に反映することへの興味は失われ、人体に快適な環境を実現するための技術的解決に重点が置かれていく。それが、建築会の活動の末に伊藤が見出した自身とモダニズム建築との距離のとり方であった。そういった意味において、大阪市立大学の建築群は、建築会のそして伊藤の大きな転機に位置する建築である。

4. モダニズム教育と「インターナショナル建築会」と伊藤正文

建築会の理念は、解散後ももっぱら教育の場において伏流となって生きつづける。バウハウスは、モダニズムの理解と浸透に大きな役割を果たした。バウハウスをひとつの理想として、モダニズムの建築・デザイン教育を行う学校が各地に設立されたが、関西にもバウハウスを目指す教育機関がいくつかあらわれる。そうした学校で教鞭をとっていた人物に、建築会の中心メンバーがいた。

本野精吾は、京都高等工芸高校（京都工芸繊維大学工芸学部）でバウハウスに影響を受けたといわれる教育プログラムを実践しており、上野伊三郎とリチ夫妻は、京都市立美術大学（京都市立芸術大学美術学部）とインターナショナルデザイン研究所（京都インターアクト美術学校）でウィーン工房を意識した教育を行っている。本野は1911年にドイツに、上野は24年にウィーンにそれぞれ留学しており、そこでの経験が、彼らの教育理念の背景としてあった。

伊藤正文もまた人生の後半を教育者として送っており、本野、上野と同様、モダニズム教育に力を注ぎ、特に女子の建築教育に熱心に取り組んでいる [fig.10]¹³。履歴書によると、伊藤の

¹¹ 「遮光庇」「ホッパー窓」などについては、伊藤正文「教室の採光方法に関する一研究」『日本建築学会大会論文集』、1936年3月号、pp.244-53、伊藤正文「Hopper窓の機構」『建築と社会』1937年4月号、pp.8-12、伊藤正文『建築保健工学』第1部、工業図書、1938年、伊藤正文『学校建築小論』相模書房、1951、pp.58-62など多数の論文、研究書が発表されている。

¹² 学校建築の環境工学的な研究については、学術雑誌などにも熱心に投稿しており、1939年の9月には環境工学分野で早稲田大学の博士号を取得している。また、同研究では建築学会賞を受賞している。

¹³ 『大阪市立大学百年史』部局編下巻、大阪市立大学百年史編纂委員会、1983年、pp.900。



[fig. 10] 伊藤正文

¹⁴ 伊藤正文, 自筆「履歴書」『昭和二十四年四月起 職員任免内申綴 家政学部』大阪市立大学生活科学部所蔵。

¹⁵ 註11に同じ。

教育者としての経歴は、大阪市在職中の1938年に、樟蔭女子専門学校の講師を引き受けたことにはじまる¹⁴。その翌年に大阪市を退職した後は、神戸工業専門学校や京都工業専門学校、早稲田大学の講師などを兼任し、自身でも女子の建築技術者の養成を目指した「婦人建築・工芸研究所」を設立する。この研究所は、1946年に「日本造形文化研究所」として再スタートしている。そして1949年4月には、大阪市立大学の創立にあたって家政学部の初代教授に着任する。工学部からも教授就任の打診があったが、女子の建築教育を推し進めたいとしてこれを断り、家政学部教授の道を選択したという¹⁵。着任後は、学部長を務めるなど、研究教育の中心的役割を果たした。教育においてはやはりバウハウスを意識し、その実現のために非常勤講師として上野伊三郎やリチ、建築会の客員であった桐本楠雅など、建築会のメンバーを起用している。

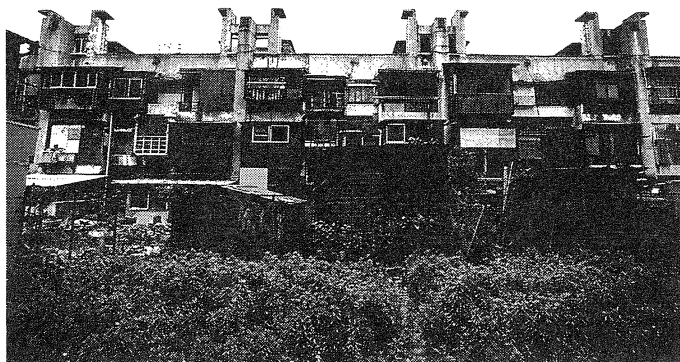
建築会の「綱領」の2番目に、「研究及創作の範囲は建築を中心として人間の生活に関する総てを含む」と記されるが、これはバウハウスの理念に通じるものであり、建築会がバウハウスを強く意識していたことが示される。ただ、バウハウスは教育を通してモダニズムを推し進めたのに対し、建築会は教育機関を持つことなく理念を喧伝する運動に終始した。そこに、建築会の活動が、その後の建築に大きな影響を与えることなく収束してしまった原因のひとつがあるといえる。建築会の中心メンバーが、やがて教育においてバウハウスを目指す姿は、建築会が行ってきた運動の限界を教育によって乗り越えようとしたものとして理解される。伊藤に関しては、大阪市立大学において作品と教育の二度にわたって建築会の理念を実践する機会を得たことになる。

5. 1930年代・モダニズム建築の行方

大阪市立大学の校舎群のほか、1930年代前半に建設された大阪市建築課のモダニズム建築として忘れてはならないものに、一連の改良住宅がある。大阪市では1927年の不良住宅地区改良法の施行を受けて、31年に下寺町住宅、32年に北日東町住宅 [fig.10]、33年に南日東町住宅の3つの鉄筋コンクリート造集合住宅群が建設される。これらはそれぞれに、立面構成や細部意匠は異なるものの、モダニズム建築の語法である構成主義的な形態、幾何学的なデザインでまとめられている。設計者は、下寺町住宅は本多正道、北日東住宅は新名種夫であることが確認されており、南日東町住宅は伊藤正文が関わったであろうことが指摘される¹⁶。建築会の中心メンバーであった技師によって、会の活動期間中に設計されたこれらの住宅にもまた、建築会の理念を読み取ることができる。

¹⁶ 川島智生「生きられた鉄筋アパートー大阪市営改良住宅1929-1938」『まちなみ』、2001年7月、Vol.25/No.288。

ここでも《インターナショナル》と《ローカリティ》との融合は、庇やベランダ、煙突の処理など各所に認められるが、もっとも注目されるのは《インターナショナル》と《ローカリティ》がスケルトンとインフィルの関係にあることである。これらの集合住宅では、躯体は鉄筋コンクリート造のモダニズム建築であるが、各住戸は大阪の伝統的住居である長屋の一戸を思わせる。象徴的なものとして出入り口側には、木製の引き戸と格子が取り付けられている。大阪の改良住宅は、同潤会が建設した猿江裏町の改良住宅を参考にしたものであることは知られるが、猿江裏町にくらべ大阪では伝統的な住文化という《ローカリティ》が強く意識されている。



[fig. 10] 北日東住宅1号館 (2002年5月撮影)

モダニズム建築は、1930代後半になると、より機能主義的、合理主義的傾向が強くなり、形態もデザイン要素を排したヴォリュームによって構成されるようになる。大阪市立大学校舎群と改良住宅は、その直前のモダニズム建築としての普遍的形態と個別的デザイン、そして《インターナショナル》と《ローカリティ》とがひとつの作品のなかでおおらかに出会っていた時代の建築といえる。

ただこれらも70年を経て、現在、建て替え事業が進行しており、改良住宅では南日東町住宅が2001年に、北日東町住宅が2002年にすでに姿を消している。大阪市立大学も、2003年5月の時点で、高等商業部校舎（現3号館）が取り壊し工事中である。また、図書館・研究室棟も一部が暫定的に利用されているほかは置かれたままとなっている。

モダニズム建築は、装飾を排した白い箱であることによって衝撃的なデヴューを果たしたが、それゆえに薄汚れた箱となった時点で訴求力を失い、いつのまにか姿を消すという運命をたどっている。それをモダニズム建築の限界と見ることもできる。しかし、歴史の理解が建築文化を醸成するものであることを考えるとき、保存か解体かという二極対立ではないモダニズム建築のあり方を模索する必要がある、今、問われている。